# 2018年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

提出日：2019/9/28

| 活動タイトル | 原発事故被災地の子どもたちの体と心の健康を守る！びわこ☆１・２・３キャンプ | 団体名 | びわこ☆１・２・３キャンプ実行委員会 |
|---|---|---|---|
| 1年間の活動（アウトプット）の目標（事業全体） | １．スタッフミーティング（定例会）の実施（年間１２回程度）<br>２．2018年度春、夏キャンプの報告会の開催<br>３．春キャンプの実施（2019年3月23日ごろ～4月4日ごろ）<br>４．夏キャンプの実施（2019年7月22日ごろ～8月24日ごろ） | | |

## ■活動報告

**◆スタッフミーティングの運営**

毎月１回、実行委員8名が集まり、参加者の受け入れ態勢、イベントの企画、ボランティアの募集、資金調達について協議した。また、春、夏のキャンプ後は、それぞれの担当部署毎に反省会を行い、委員で共通理解し、次回に生かせるように話し合った。その他、委員それぞれが保養事業に関わる研修会や講演会に参加して得た情報を他の委員と共有した。

キャンプ中のミーティングはボランティアも含めて毎晩行い、当日の子どもたちの様子を紹介し課題があれば話し合い、ヒヤリハット事象の反省等についても共通理解を深め、再発防止に取り組んだ。また、翌日の行事の打ち合わせと準備を行った。

**◆2018年春・夏キャンプの報告会**

キャンプでお世話になった方々や一般の方々を対象に、2019年2月10日に、2018年に行ったキャンプの報告と写真展、福島県飯舘村からの避難者のお話会を催した。

**◆春キャンプ実施（2019.3.23~4.6）**

参加者：子ども46名、成人1名、保護者ボランティア１名

子どもたちは寒さを気にすることなく、雑木林で秘密基地を作り、琵琶湖まで歩きや自転車で行ったり、野草摘みに行ったり、思う存分自然と触れ合うことができた。また中高生がボランティアとして活躍してくれ、その成長はスタッフの励みになった。

**◆夏キャンプ実施（2019.7.22~8.20）**

参加者：子ども62名、成人１名、保護者ボランティア5名　子どもたちは、連日の暑さにも負けず、虫取り、川遊び、サイクリングに興じた。夏まつりではリピーターを中心に子どもたちが意見を出し合い、準備から当日の運営まで頑張って取り組むことができた。

## ■1年間の目標に対する達成状況

**◆スタッフミーティングの実施**

ミーティングの開催については、当初予定通り12回実施。

また、キャンプ中のミーティングも当初予定通り、毎日実施。

**◆2018年春・夏キャンプの報告会**

報告書の完成が遅れたため、報告会で配布することができなかったが、チラシを見て初めて保養に関心を持ってくださった方が参加してくださり、避難者のお話を聞いてもらうことができ、原発事故を風化させないための取り組みとして効果があった。

**◆春キャンプの実施。当初予定通り。**

春キャンプでは恒例イベントの“野草を摘んで食べる”、日本の伝統食である“味噌の仕込み”を、今年も実施することができた。また放射線の影響を軽減するために各自ができることを考える機会を設け、子どもたちに食の大切さを伝えることができた。

**◆夏キャンプの実施。当初予定通り。**

暑さにもめげず、毎日思いっきり自然の中で遊ぶことができた。中学生以上の子どもたちはスタッフやボランティアの手伝いを積極的にしてくれるなど、キャンプを一緒に運営していこうとする姿勢が伺えた。受け入れ自治会を対象にした防災のお話会では、避難者のお話を聞いてもらうことで、地域の防災の意識を高めてもらうことができた。子ども夏祭りでは、子どもたちが中心になって計画から実施まで取り組むことができた。

## ■活動風景

生き物探し

宿舎近くで小さな生き物を探す。知らない生き物が見つかると、図鑑で調べる。宿舎の玄関には飼育ケースの団地が出来る。

子ども夏まつり

子どもたち主催の夏まつりは大人もお客さん。

この日はお世話になった方々や自治会の方々も招いて交流する。

一から手作りの夏まつりは子どもたちの１番の思い出になる。

## ■1年間の活動のまとめ

保養キャンプを始めて7年が経ち、実行委員と参加者だけでなく、支えてくださる方々との繋がりも随分広がってきた。今年も新たな繋がりから、イベントのゲストに来ていただいたり、ワークショップの講師に来ていただいたりした。またそのイベントに地域の方々に参加してもらうことで、保養の意義や被災地の現状を知ってもらい、震災と原発事故を風化させず、被災地や子どもたちに心を寄せる方を増やすことができた。

キャンプの日常では、多数の上級生がボランティアとして参加して下級生の面倒をみてくれるようになり、ますます大家族のようになってきた。「キャンプが第２の家」と言ってくれる子どもたちもいて、心の安全地帯としての役割が大きくなっているように感じる。将来、スタッフになりたいと考えている子もいるため、運営を引き継いでいけるように、今後システムを整備していきたい。

## ■事業を通じて得られたノウハウ

・自由記述の感想の中から、特定の言葉をピックアップしてカウントすることで、関心の高さや意気込みを知ることができた。

・子どもたち三人に一人の割合でボランティアがつくことで安全な見守りができた。特に、サイクリングや野外に出かけるときは、学生ボランティアは大人と二人一組で見守りに当たってもらうようにすることで、より安全に子どもたちを遊ばせることができた。

・新しい出会いを大切にし、他団体のイベント等で知り合った人にも声をかけたことで、ボランティアを増やすことができ、ワークショップの講師に来ていただくことができた。

・７年間、19回と回を重ねてきたことで、受け入れ自治会の納涼祭に招いていただいたり、住民のみなさんが繰り返し送迎等のボランティアをしてくださるなど、協力関係が形成されてきた。

## ■実施した人材育成策

・スタッフが勉強し、子どもたちへ放射線の影響と食育について話すことができるようになった。

・ボランティアを申し出てくれた中学生、高校生に役割を持たせたことで、達成感と責任感を感じてもらうことができ、次回のキャンプへの期待に繋げることができた。

・宿題を終わらせた子どもたちに調理の下ごしらえに参加させることで、食に関心を持たせると共に、責任感と達成感を感じてもらうことができた。

## ■活動成果のアピールポイント（自由記入）

| この1年間の活動を通じて | 子ども延108名、大人延8名に、思いっきり自然と触れ合って、保養してもらうこと | を達成しました。 |
|---|---|---|

## ■受益者の変化（効果測定結果等）

・食への関心が高くなり、好き嫌いが減った子が多かった。また、家では少食と言われていた子が、おかわりをするぐらいたくさん食べられるようになった。

・学校等で居場所がないと感じている子が、キャンプに来ると友達ができて楽しく過ごせ、孤立感が軽減できた。

・放射能に不安を感じている親御さんには、子どもたちが保養に参加して元気に過ごしていることをフェイスブックで紹介することで安心してもらえた。